
カケモノ

千

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カケモノ

【Nコード】

N4649R

【作者名】

千

【あらすじ】

皆城白は、あまりにも人として外れた存在である。人の形をして
いるだけのナニカであり、それゆえに賢者と呼ばれるに至った人の
様な生き物。人に擬態して、人だと偽り、人として生きようとする
存在だ。形を保つが故の異形であり偉業であるが、けっして誇れる
ような輝かしいものでは断じてなく、存在する価値すら欠落した損
在であるからこそその自己を保つ技を持たねば、誰からも忘れられる
哀れな存在でしかない。しかしながら周りがそれに気付けないのは、
異和感すら感じないのは、彼もまた元人間であるからか。修繕不可

能なほどに歪だからこそ同じ歪を呼び寄せ、自分にとっての損にしかならないと理解しながらも、彼は『化物』になるのを拒み抗い続ける。

序章

男が何かを唱えると同時に、虚空から様々な色をした光の玉が現れた。

燃え盛る朱色の玉、流れるように形を変える蒼色の玉、ごうごうと音が鳴る空色の玉、不変たる硬さを持った琥珀色の玉、不規則な点滅を繰り返す黄金色の玉、這いずるように蠢く夜空色の玉、ひたすら純粋な光を放つ白色の玉。見えないのに存在感を放つ無色の玉。大量に現れた大小様々なそれらは男が手を動かすと同時に、与えられた生命を精一杯謳歌するように動き回る。時には止まり、時には回り、見る者を楽しませるそれは、事実他人の期待を歓喜へと変えるには充分な優雅さを持ち合わせていた。

女が拳銃をはるか上空に構えると同時に、光の玉はぴたりと動きを止める。拳銃の引き金が絞られると、光の弾は女の周囲をぐるぐると、グルグルと回り始めた。

光の玉は段々と尾を引くほどに高速で動き、やがて銃口の手先一つにまとまり始める。極彩色を放つようになった光の玉は、女が引き金を引くとともに高く高く空へと弾けるように飛んでいく。真上に昇る太陽と光の玉が重なった瞬間、鏡が割れるような音が響き渡った。

舞台の会場全体に降り注ぐ、光の欠片。

観客たちの興奮は鳴りを潜め、声を。いや、息すらもすることを忘れ、幻想の中に放り込まれたかのような錯覚を味わっていた。

それほどなまでにその光景は幻想的で、神聖で、神々しかったのだ。

最後に男と女が一礼をすると共に、連鎖反応を起こし爆発するように歓声が湧きあがる。興奮と感謝と感動を届けるように、男と女が退場してからもしばらく会場を揺らしていた。

——懐かしい記憶だ。色褪せてなお輝く、幼き頃が一番

の思い出。憧れと夢。人生の分岐点。世界がまだ輝いていて、良い一面を純粹に信じられて、人が素晴らしいとだけ思っていて、正義のヒーローがいると信じられていた、そんな過去。

『無色透明』と呼ばれた男と、『再起不能』と呼ばれた女によるショーは、まだ幼い僕に将来への夢と希望を与えるには十分だった。いつか自分もあの二人のように、そう思うのは仕方のないことだった。

故に、故にだ。一癖二癖どころか十癖ぐらいはある両親をもってしても、あんな化け物じみたことはできないと。

二人で魔王五人分なあの人たちと同じ事をするなんて、とてもじゃないけどできない。そう困ったように苦笑するだけという現実を知った時。

幼き夢物語は、夢物語としてすら語られることなく終えたということもまた、同時に知った。

所詮ショーだ。本気を出す意味が感じられない。男と女にとっては精一杯手を抜いて、なおかつ楽しませられるように調整しただけなのかもしれないが、もしそうだとしても、尋常ではないほどの技量。手を抜いてでさえ並みの人では追い付けない領域、その中に男と女はいたのだった。両親は嘘がつけないと幼いながらに分かっていたから、手を抜いたということは紛れもない事実だと事を知ってしまった。

恐れ忌むべき最害災厄として語られる魔王。それが、五人分？確かに、その時のショックは覚えている。

世界が崩れる音を聞いた。その音を含む全ての音が死んだ。見えるものの全てが遠く離れる感覚を覚えた。涙すら湧きあがらない。絶望という言葉をおこがましくすら思えた。とある町のとある一角で、自分という存在はかつてないほどボロボロになり果てた。空前絶後の前代未聞。未曾有かつ異例の緊急事態。緊急連絡、危険信号。

記憶の中の僕は、確実にそれを感じていた。あまりに衝撃的すぎて逆に膝が崩れることはなかったけど、足元が壊れて出来た穴に

落ちていくような感覚——具体的に言うなら、途方もない”諦め”を感じていたんだ。

晴れ渡る空も両親の顔も、多種多様な人の顔も、質感のある地面も、その全てが遠くなっていた。比喻などではなく、確かな視覚情報として僕から全てが引き延ばしたように遠ざかっていくのを見た。

幻覚であるがゆえに、幻覚を見てしまうほどの衝撃だったんだと認識してしまう。

それほどなまでに聞いた話は非現実的で、しかし現実だったんだろ。

でも、諦めきれなかった。割り切ることも逃避することもせずに、ただひたすらにがむしゃらに走り続けると。多少の妥協を混ぜようが辿り着いてみせると決めた。

それこそ子供のような夢物語。だが諦めることはできなかった。正確に言えば、多少の諦めは許容範囲内だが全部も全部諦めることはできない。

幼いが故の都合のいい取捨選択は、当時の僕からしたら最善の選択のように思えただろう。両親にそのことを話したら頷いてくれた。頑張れと笑顔で言われた。その笑顔が嘘偽りで覆い尽くされた紛いものだとすら思わずに、裏に隠された真実を見抜こうとすら思わずに。

だから、だと思う。

血反吐を吐くほどの努力がある意味では望まない方向に開花すること、その結果としての僕に残った未来の選択肢も、選択肢の過程に存在する僕と同族でありながら、決定的な違いを持つ人たちの出会いも。全てこの身に降りかかるということが必然であることも、すべて。

警告していたのだ。無為になると、無駄になると、無下になると、無意味になると。

正直に言えば、浮かれていたのだ。だから仕方が無いのかもしれ

ないが、もしもの話をするのならば、過去に戻れたのだとしたならば。僕はこの時点の僕を殺してでもとめていただろう。僕の両親も、必要と判断したなら周りに居たすべての人も。

だが、全ては後の祭り。

浮かれていたからだ。この時点で警告が出ていたことに気付かなかったのは。

男と女、その片割れ。『無色透明』が僕を見ていたことに気付かなかったのは。

——まるで許しを請うような。あたかも贖罪を求めるような。罪悪と後悔と自責の念に溢れかえった視線を、僕に向けている事に気付けなかったのは。

一話 1

「——はっ……と」

憎たらしいほどに清々しく広がる空。

半透明の濁った結界に囲われてるんじゃないやあ、空なんて言い方はおかしいかもしれないが、見える限りの最上に位置する何かとの間に遮蔽物が無ければもはやそれは空と言えるだろう。で、今僕の視界にあるのは紛れもない空なわけであって。

つまりは、夢から覚めた僕の視界に入っていたのがそれなっただけの話である。辺りに鳴り響いている規則的な音からして、チャイムの音で目が覚めたようだ。

屋上を囲む落下防止用の鉄柵の隙間からちらほらと人影が見える。どうやら下校時刻らしい。

それにしても、いまのは夢？ 快適な睡眠を貪ろうとしたにしては、随分とまあ空気を読まない夢だ。仕事しろよ夢、働けよ夢、逃げるなよ夢。昼寝をした僕がバカらしくなってくるじゃないか。しかもよりにもよって、一番思い出したい記憶を見る羽目になるなんてね。ロープの下は汗まみれ、寝ていたときの僕は多分うなされていたと思う。

というか確実だ。何故今になって人生最大級に気分が悪くなる記憶を見たのか、自分の体ながら理解しがたいものがある。

人間が睡眠をしている間に見る夢は、起きている間の記憶の整理であるなんて言われているけど。今このときばかりはどうも信じられない。接合性の無い夢の内容には、どう説明をつける気なのか。現に過去の夢を見たりだとか、起きている間の記憶などとは全然関係ないじゃないか。

……まあ？ たしかにここが人が大勢集まっていると言う意味合いであれば接合性があるといえるし、夢に出てきた二人——『無色透明』と『再起不能』の二人の職業もことは関連性があるし、

まあ、そこまで気にするほどの事じゃあないんだろうけどさ。

でも気になるものは気になる。なぜなにどうして、その奔流。疑問猜疑のオンパレードだ。そもそもが僕個人の気分の問題なのだから、あーだこーだ言う権利つてものがないのかもしれない。原因が分からないんじゃない。

けれどもだ。情眠を貪る権利は等しくあると思うし、だいたい休息の時である睡眠で夢見の悪さで疲れるとは何事か？ 賠償金慰謝料謝罪有罪判決その他もろもろ要求したいところだが、やるだけむなしくなるだけなので止めておく。あえて悪く言うなら後回し。または問題の先送りとも言う。

なあなあになってしまふけれど仕方が無い。判断材料がこれでもかってぐらい無いのに決めつけるのは愚の骨頂であるからだ。ちょうど下校時刻みたいだし、タイミング的にももってこいだ。

「……んん？ 下校時刻？」

はて、僕は一体どれくらい寝ていたのか。

記憶を手繰り寄せると、学園についてから即屋上に行って眠りについたらしい。そういえば、今にもぶっ倒れそうなほど眠たかったのを覚えている。脇目もふらずにここに行ったんだから当たり前かなるほどなるほど、とすれば眠っていたのも納得だ。

違う、違うぞ僕。何を冷静になっっているんだ。どう考えてもやばいだろうこの状況。

まずは先生たちだろ？ それと風紀総会に刑罰執行部。うん、やばい。明日を生きる気力が奪われるくらいにはやばい。さすがに風紀総会総長が出てくるとはないだろうが、先生たちと合わさったら軽く人海戦術が実行できるほどのな。僕如きに抗えるはずもない。

落ち着け。冷静に考えろ、思考を限界まで張り巡らせる。ここでまず懸念すべきは、先生たちや風紀総会、それに刑罰執行部なんかにも見つからずに家に帰るための進路確保だ。当然のことだが、午前午後とぶっ通しで各科授業をさぼっていれば罰がある。

校舎五周？ 反省文十枚？

それだけで済むのなら願ったり叶ったりだが、まず間違いなく絶望的だろう。

というか少なくとも刑罰執行部であるあの人が関わってくることは確実なので、早急に逃走経路を作り上げておかなければ。誰が好き好んで部員数0の顧問一人で正式に部として成り立っている、強引に成り立たせた人による刑罰を受けなければいけないのだ。

何度も受けた身としては、ぜひとも末永くごめんこうむりたい。

一度刑罰が執行されたら終わるまで人間的扱いをされないとか、あまりにも惨い内容に誰一人としてその内容を覚えていないだとか、そもそも顧問の先生は本当に人間か？ などなどいろんな噂が飛び交っているせいで、気恥ずかしくて仕方が無いのだ。

なぜかと問われれば僕の身内が関わっているから、としか言いようが無いのだが。

「よつ、と」

このまま寝っ転がっているのもなんだしと、体を起き上がらせる。どのみち逃げる気満々だけど、少しでも早く動けるようにしないと意味がない。

そうしなければ逃げられないのがここ、開拓士専門養育学園プラスワンのだから。逃走最優先シンブルイースベストでいかないと。策を練る暇があるぐらいなら一歩一歩に全力を出すこと、全力を持続させた方が効率もいいし。

うーむ、効率云々で考えるなら道連れでも作った方が……いやいや、どちらかでいえば共逃者オーガって言った方がいいな。いざという時には犠牲にもできるのもあるけど、ぶっちゃけ一人で逃げるのは怖い。全長十数メートルを誇る大鬼の集団に追い掛け回される気分なんざ二度と味わいたくなくなるぐらいのもので、最悪それが何倍にもされる時があるのだから。

誰しも嫌なものは嫌なのだ。

快く付き合ってくれる稀有な人物を僕は知っているし、丁度いい。今はまだ教室にいる……はず。確証が持てない事があいつの特徴み

たいなものだし、仕方ないとは思っけ。

あー、でもな。うまい話には裏があるように、あいつに頼るのはリスクがあるんだよな。この状況だからこそのリスクと言えるから普段はどうでもいいんだが、今あいつを頼るとなるとなかなか決断に迷ってしまうのだ。そもそもが僕はちゃんと刑罰を受けるべきであるからして、リスク云々を考えるのはお門違いというもの。

だからなんだといえばそれまでだけど。責任放棄だと理解していても考えるのが僕であり、やはり嫌なものは嫌。というか誰しもそうだろう。進んで自分からあれを受けに行くのは余程の真面目な人かDMか、そのどちらか。それ以外にあり得たら怖い。

危険率こそ上がるが成功率も比例していく上がっていくのだ、それ以外に選択肢も無い。普通なら迷わず選ぶだろうけど……。

「でもなあ、普通が当てはまらないような奴に頼るってのはどうも快く——どころか、自分から全身突っ込むような奴だしその部分は問題ない。だからといって問題が無くなったわけじゃないし、困ったな。今月分の貯金も残り少ないし正直きつい。大体何を求められるか分からないってのが一番厄介なわけだし、あの気分屋で自由奔放で唯我独尊で傍若無人。我がままに我道を突き進む理不尽の塊みたいなのに頼る事自体がリスクでどうにもはばかられるんだけども。グチグチ呟こうが大声上げて拒否ろうが、選択肢なんてあつて無いようなものだからねえ。頼るやつもこれから逃走劇を繰り広げるやつも普通じゃないから、迷った所で本末転倒なんだけど」

いままで僕が頼ったあと、あいつは”対価”と称して色んなものを要求してきた。限定の菓子だったり部品の材料だったり様々で、しかも直前まで何を要求されるか分からない。だから頼るのは、みたいな感じになる。

……さてよ？　ならあいつをいざという時じゃなくて、わざと犠牲にすればいいんじゃないか？

「いや駄目だる僕。何かが盛大に間違ってるから。……さて、もうそろそろ——」

「——楽しい楽しい、抱腹絶倒な刑罰の時間ですからねはーくん？　観念しやがるといいです！」

………でたあ。ついに来たかマイシスター。出てくるの早すぎるんだよもう少し空気読もうよ。いやまあそろそろだとは思ってたけど、仮にも教職に就く人が屋上の扉を文字通り蹴っ飛ばして参上とかそれで良いのかと。なんかギギギバキヤボゴアとか聞こえちゃいけない音が僕の耳を突き抜けたんだけど。

後ろを振り返れば案の定だ。

精巧な顔立ちとでも言えいいのか、僕と同じ灰色の髪には僕とは違い艶がある。眉も、目も、口も、表情すら言動とは裏腹に僅かしか動いていない。慣れ親しんでいない、もしくは見慣れていない人には本気で無表情にしか見れないだろう。人形じみたその顔はまさに精巧そのものだ。

体つきは……まあ、その、なんだ。一部の特殊性癖を持った方には喜ばれる、狂喜乱舞されそうな、なんとも可哀そうな寸胴体型である。ペターン。ペラーン。ペターン。

真っ白なワンピースも合わさって、兄としては変態に連れ去られないか心配です。絶対杞憂に終わると思うけどさ。というか、教職に就いてるならちゃんとした服を着なさいと。

「なんですかその目は！　妹の体舐めまわすように見てそんなに楽しいかこら！　へ、変態？　父様と同じく変態ですかあ！？　このシスコン、ロリコン、ペドフェリアー！」

「違うから、全く違うからっ。冤罪もいいとこだってば」

「嘘です嘘です、仮にも身内であり血の繋がった私相手に穴が開くほど視線を送るなんて変態の所業に決まってるんです！」

「いや、いつもながらぶっ飛んだ妹だなと。屋上の扉だって数十キロはあるのに蹴り一発で吹き飛ばすは、教員にあるまじき服装だし、史上最年少の十三歳で開拓士教員の資格を取得、そのまま義務教育終了後に教職に就く……そして二年前から変わらず成長しない体型間違いなく血筋だねうん」

目を瞑るまでもなくいつでも思い出せる、蛮行にも似たいい意味も悪い意味も混ざりこんだその行動。母様が昔を思い出すと言っていたのも納得な、あまりにも歳とは乖離した結果をもたらすその才能。

だからこそ兄である僕、皆城白にとつては気の抜けない相手であり、油断の出来ない相手であり、天敵であり弱点であり嫉妬対象であり誇らしい相手であり、同時に手順を間違えなければ容易に攻略可能な相手である。

「なっ！？何を言いやがりますかこの愚兄は！体型云々は許すとしましよう、ですが血筋とはどういうことですか！納得できません。あれは親でもなんでもないです、あれはただの変態です！今朝だって母上は勝手に布団の中にもぐりこんで胸に手を這わせながら痛いのは最初だけとか抜かしやがりますし、父上は四十代の癖にいまだに私にキスを迫ってきますし！」

うんうん、毎日のように見ているから苦労自体はよく分かるよ？でもだからって刑罰の執行宣言をしないなんて、少しばかり油断しすぎなんじゃないかな？

でないと、さ。

「ええい、むかつきますが今は関係のある話ではありません。ここは職務を全うするのが常と言つもの、私情を持ち込むなどもつてのほかです。刑罰執行部顧問皆城纈夢、刑罰を執行——って、居ません！？」

こうして逃しちゃうわけだよ。

「ちょ、ま、待ちなさい！！」

待ちません。

一話 1 (後書き)

一話 2 (前書き)

一話 2

ところで、プラスワンは学ぶものが一つしかない。それすなわち、開拓士としての必要最低限の知識と戦闘技術。普通ならその命の危機に関わるという常識、開拓士という職業の内容故に入学などないだろう。だというのに在学学生は多い。入学人数は毎年約三千人、最短で三年最長で五年という在学期間を考慮しても各学年の合計はゆうに一万人を軽く超えるのだ。

その理由としては、やはり得るものが多い事が挙げられる。開拓士は大金持ちという認識も間違っていないほど、都市の運営者からの報酬は多い。一般的な一カ月の収入が九十万円だとするならば、開拓士のそれはゆうに三から六倍に跳ね上がる。

まあ、これは当然なのだけど。命を懸けて都市という堅牢な城を自ら飛び出し、血と汗と硝煙と様々な現象による結果しか残らない非情な戦場へと赴き、さらにはより都市を潤す交易品や他都市への輸出品に開拓士の武装の素材、拳銃の果てにはオーパーツやオーバーテクノロジーやらそれらの設計図（さすがに滅多に出回らないが）などなど、利益こそあれ不利益など無いのだから、むしろそれぐらいで済んでよかったと安堵出来るほどのものだ。

だからなぜか——いや、なぜなに云々がまるで無いかのように躊躇も戸惑いもなく、プラスワンに入学する人は多い。自分の意思も他人の意思も関係なくひつくるめて、プラスワンに集う人は実に多いのだ。

個人の見解を入れるなら、なに死体を量産してるんだとかそんな思いがあるんだけど……同じように在学している僕が言える立場じゃない。

ともかく何が言いたいのかといえば、在学生の増加に比例して増築を繰り返し、プラスワンは複雑かつ巨大な建造物に変貌を遂げている。つまり、逃走ルートが滅茶苦茶あるという事である。

「ふいー、これで一時的には大丈夫かな？」

あのあと。

階段の全段飛びをしたせいでさらに強まった制止の声を一切無視し、僕は逃走を開始していた。後ろから襲い来る爆走妹の留まることを知らないポテンシャルの高さに戦慄していたが、集団で無いならと気合を入れ直し【? - ?】と書かれた札の貼られた板が示す教室の前まで逃げ切った。後ろを振り向いたらわが妹が明らかに法則を無視する動きをしていたのには驚愕したね。あれは血が繋がっていると感じたくない人であり人間を凌駕したナニカだと、改めて認識しました。

多分集団がプラスされていたら逃げられなかったね。

ともかく、目的地にきたのに目的を達成しないのでは意味が無い。僕は扉に手を掛け、勢い良く開く。

六角形の机が規則的に、しかし所狭しと並んでいる。いつもなら電源の入っている電子黒板も、放課後だからか電源が切れていた。照明も切れていて窓から射す人工的な夕日が教室を照らしている。

清掃ロボとして高性能かつ安定した性能を持つ p - m i の駆動音が逆に静寂な時を創り出して、ノスタルジックな気分させるようだ。ああ……いいね。この静かな音が全身を包み込む心地よさが僕、結構好きだったりする。落ち着いていられる状況だったら最高なんだけど、そこは自業自得。

はぁ、と幸福の余韻を味わうように息を吐きだす。そのまま教室内を見回せば——いた。やっぱりここにいたか。

彼女は教室の真ん中に陣取ったままこつちを向く。

「やぁ、夕里。ずいぶんと暇そうだね？」

優しい雰囲気放つオレンジ色の髪に赤色の釣り上がった眼。口元から覗く八重歯は獣のようで、身を竦ませてしまう迫力だ。学園指定の制服に身を包む、などということはなく。黒地に三本の白い線が走るシャツの上からポケットがたくさん付いたベストを羽織り、下は厚手の生地で作られただろーシンプルな紺色のズボンを着いて

いる。かなりスタイルがいいというか、長身でありながらバランスの取れた体つきをしている。俗に言う美人、それもかなりのレベルだ。

「暇？ あー、そうだな。確かに暇だな。なんだその口振り？」

「いやいや、決まってるでしょ。勿論夕里の大好きな、面倒事を切り抜ける手伝いの依頼だよ」

「乗ったあー！！ さあさあどんと来いよ気が滅入っちゃうぐらい些細なことだろうがとんでもない大事だろうが魔王の退治も勇者の暗殺もなんだってやってやらあー！！ 聖人聖女の魔人化だって庭の草むしりだって含まれてるぜ？ あ、報酬は忘れるなよー」

……残念な、が後ろに付く美人であるが。他人の面倒事に自分からか、あるいは依頼という形式でも関わり解決をするのが大好きという変人。そのあまりにも美人が台無しな奇行っぷりに『世話好き請負人』なんて呼ばれてる。

しかも、下手な専門の人に依頼するよりも解決率が絶対的に高いから頼りにされることも多い。

僕の幼馴染、姫乃木夕里ひめのきゆうりとはそんな残念で優秀な美人さんなのだ。

「毎回思うけど、夕里の原動力っていったいなにさ？」

「決まってるだろー？ 報酬だよ、報酬。どんな面倒事だろうと解決してやる代わりに、オレの要求する報酬を支払ってもらう。ここは人が集まるから依頼も来るし、オレも依頼主も満足のいく結果を得られるんだから万々歳だろ？」

「依頼として受けるだけ、なら万々歳だろうさ。でも夕里、自分から首突っ込んで報酬貰うのはちょっとばかり頂けないと思うなー？

一番の被害者が誰か、忘れたとは言わせないよ？」

「はいはい分かったよ分かったから睨むなって。んで、今回の内容はどんなんだよ？」

言うだけ無駄である。

「……僕の妹にして刑罰執行部顧問兼座学科教師、皆城纈夢からの逃走。その手伝いだよ」

「ふーん。なあ、お前またなにかしらやらかしただろ？ 前々から忠告してやってるじゃねえか、瀬夢相手に隠し事は無理だって。兄であるお前ならなおさらさ。妹の事は兄が一番知っているし、兄の事は妹が一番よく知っている。これ、真理の一つだからな？」

「随分と安い真理もあつたもんだね」

僕に指を指して指摘してくるだけあつて、的を得ているとは思っけどさ。結局仮定の話でしかない以上、説得できるほどの信憑性はない。だからどうだと言わんばかりの表情をするのは止めてくれ夕里。こっちが恥ずかしい。

「報酬は……そうだな、久しぶりに結晶^{けいしょう}さんの作った飯が食べたいな」

「父さんの？ や、まあ……別にいいけど。夕里」

「あん？」

「それでいいのか？ 僕としては散財も覚悟していたから、ちよつと拍子抜けなんだけど」

意外だ。夕里がこうも安い報酬を求めるのは滅多にない。ひよつとして、なにか企んでるんじゃないだろうか？

だが夕里は心外だと言わんばかりに眉を顰めた。

「おいおい、お前の中のオレの評価が気になる事言ってくれるじゃねえか。別にいいだろ？ 久しぶりも久しぶり、今となつては年に数回しかお前の家には行かないんだから、懐かしの味を求めるつてやつだよ。それに、結晶さんもミカさんも喜ぶだろうしよ」

そりゃあ、喜ぶだろうさあの二人なら。なんてつたつて僕の両親だ、僕と夕里が幼かった時からの付き合いでもあるし、夕里が家に来たなら狂心乱舞の勢いで喜ぶ姿が容易に想像に付く。わが世の癒しキター！ だとか叫びそうだ。癒しとか笑える話だろ、どこに癒しがあるぞ。

うーあー、なんかげんなりとしてきた。父さんならまだマシだけど、母様はだめだ。きつと瀬夢共々布団に押し込んでやつちやいないことしようとする。

レズビアンだかなんだか知らないけど、少しは自重することを覚え
ないことか。父さんも寂しがってたし、そもそもよく子を産める
ほどの仲に発展したなと感心する。多分母様のそれは欲求を抑制し
てきた反発だろうし、仕方が無い事だとは思うけどさ。

それに、心配はいらない。夕里なら母様の犠牲になるなんて事は
あり得ないからな。

「まあね。ん、分かった。それじゃあこれで契約成立だ」

「おう！ 安心しろ、纏夢は仕事の事もあるだろうし校舎の外には
出れないはずだ。依頼の達成条件はお前、皆城白とオレがみなしろはく纏夢から
無事逃げ切ること。いいねえ、楽しくなってきたじゃねえか！」

そう言っで手で膝を叩きながら立ち上がる夕里の顔は、寧猛で野
性的ながらも輝いていた。

……ヤバい、見惚れてた。夕里は気付いてなさそうだから良かつ
たけど、もし気付いていたらからかわれてるところだった。「おー
おー照れちゃって、白くんかーわーいーいー！ あっはははははは
ははー！」とかそんな感じで。

いやはや、危ない危ない。ある意味纏夢から逃げるよりも危機感
があつたね。……ん？

あー、そろそろヤバいかな。流石に留まり過ぎたか。うん、夕里
の言う真理つても馬鹿には出来ない。分かる理由が経過時間と纏
夢の移動速度を計算してつてのは夢の無い話だけだ。

「夕里、そろそろ来るよ」

僕が言い終えるとはば同時に、教室の扉が音もなく、しかし勢い
良く開く。そのまま空中で回転しながら教卓に着地したのは予測通
りで予想通りで測定通りで計算通り、纏夢であつた。

「ふうははははー！！ 追いつきましたですよはーくん。さあさ
あさあ、今度こそ観念するです……おや？ あなたは確か夕里さん
でしたね。兄がいつもお世話に……いえ、むしろあなたが振り回す
側でしたか。はーくんと仲むつまじく過ごすのは勝手ですが、だか
らといってはーくんを碌でもない事に巻きこむのは止めてください

ね？ 私がはーくんいじれなくなったらどうしてくれるんです。こちららだてに十七年間妹をやっていませんから、まさに一心同体はんしんはんみ半心半身という訳ですよ」

途中までしか感動できないんですけど？

親心子知らずならぬ兄心妹知らず、なんとも寂しくさせてくれるなあわが妹は。数年前までは兄様と呼んでくれた面影は、今はもう無い。世の中にあるものは常に移り変わり行くものであるが、やはりくるものというのはあるのだ。

それに、縹夢だって人の事言えない。僕からしたら夕里に振り回されるよりも縹夢の刑罰執行のほうがよくばど碌でもないのだ。蟻と象、個人と集団。パワーバランスがこれでもかってぐらい崩れているのに、わざわざ崩した要因を自分から選択するのは愚の骨頂。阿呆のする最低最悪の選択だ。

妥協と、取捨選択。その結果が夕里に依頼する選択をもたらしたのである。……結局の所どっちもどっちなんだけど。

「おいおい、そんなに睨まないでくれよ？」

なにをどう判断して睨んでいると思うたんだよ？ 端から見

たら無表情のはずなのに、当たってるから怖いんだけど。

「別にオレはとって食おうとしてるわけでもなし、むしろ協力を頼まれたのはこっちのほうだ。正当性つてのがあるんだよ。それをんなゲームの最初だけしか活躍しない、便利ただし物語上ですぐ死ぬような死亡フラグ満載のセリフくっちゃべってんじゃねーよ鬱陶しい」

「なにを言いますですか貴女！ そういうキャラは条件次第で生き残ったりするんです、バカにすんなです！ ええ、ええ、そうでしょう。なんど私も苦汁を飲んだことか。数え上げればキリがありません。しかしです！ 少しでも救いたいと思ったのなら、いかなる手段を行使しても救いたいと思うのはゲームにほんの僅かでも触れたことがあるのなら当然の心理です！」

「知るかブラコン無乳」

「なんですかオレっ子巨乳」

「「あゝ？」」

「なんで二人とも喧嘩腰なのさ？ ヒートアップはそこまでしてくれ、というか最初からしないでくれと言っというて、はい夕里とつとと逃げるよそこに居る妹はほつとこうねー？」

夕里の手を握って走る。ちよ、ちよつと待ちなさいです！！とか叫んでる妹はほつというて、この場の空気に耐えきれない僕はとつとと逃げる選択肢を取ったのでしたつと。

教室を出て廊下を全速力で走り抜け、相変わらずの法則無視をしてくる瀧夢から逃げる僕。振り返れば罅やら穴やら割れた（十トンの衝撃や重さにも耐えるはずの）強化ガラスが視界に入り込んで――どう考えても我が妹の減給は確定だねこりや。

いや、確か大丈夫だったかな？ 瀧夢はいくら校内で器物破損をしようが許される、教員内でも特別過ぎる待遇だったはず。我が妹の事ながら、なんと異例なことだろうか。

万人がその待遇に不満を持たないのもまた、異例さに拍車をかけている。

その妹は今、後ろで上下逆さになって追いかけているのだが。

「おいこら、離せ白！ なんで俺がお前に引つ張られてんだよ！！」

このままだと追いかけるのがオチだろうか！！」

「分かってるよ。だからさっきからずつと牽制として、こつちに飛んでくる破片を投げ返しているわけなんだけど……意味無し。レベルで裏ボスに挑んでいる気分、つまり最悪の状況だね。瀧夢に当

たる瞬間砕け散ってるから……瀧夢の十八番、【我が身は檻の内】アイインザプリズン

か？ 服に刻まれた刻印を用いる《刻印魔術》、大人げねー。通常技にして上位の防御魔術を生徒相手に使うとか、さすが刑罰執行部顧問出鱈目もいいとこだ」

「おいおいおい、俺の千回連続依頼達成成功という荣誉に泥を塗るつもりかテメエ」

「それ自分で名付けた荣誉じゃん」

「な・に・をごちゃごちゃ言ってやがりますかこのボケボケ共！！
あとはーくん、大人げないだの出鱈目だの言わないでください！
いくら私でも傷つきますよ本当に！？」

「いやいや、今現在の自分を鏡で見みなさいよ、世にも恐ろしい
天上走りの女が映ってるからね？」

「余計な事言うなバカ兄iiiiiiiiiiii！！」

おおう、心からのシャウトだ。

それにしても、いや、場違いだとは分かっているけど僕はこの時
安堵していた。まだばれてはいないようだ。

思い返すのは僕が受けた一番最初の縹夢の受け持った授業。縹夢
は挨拶代わりとばかりに【我が身は檻の内】アイインザプリズンを見せつけ、強烈なイ
ンパクトと共に教わるにふさわしい相手だと魅せつけた。

その時、まずは発動させてから魔術の名前を言ったのだが――
僕には分かっていたのだ。縹夢が魔術名を言う前から、始めてみる
魔術にもかかわらず。いかなる用途なのかも、どの系統なのかも、
発動に必要な条件も、刻印の形も全て。克明に鮮明にこの魔術はそ
れだと。事実それは当たっていたし、僕はその事には驚かなかった。

ああ、またかと思っただけだ。

この事は、まだだ。まだ時期が来ていない。だからまだ明かすに
は早すぎる。

「おい白、おい！ このままだと埒が明かねえ、オレは全力の三十
%を出すからお前は縹夢の動きに全神経注ぎこんでオレに指示を出
せ！ そろそろくるぞー！！」

「ん？ ああ、なるほど。分かった、僕が走るのはここまでだ。あ
とは任せたよ？」

「おお！ オレが魔術使うまで時間稼げよ？」

夕里の怒喝に意識を浮上させ、僕が前方を見ると校舎を出る直前
だった。確かにあとは夕里に任せた方が楽だと判断すると同時、僕
は夕里の腕に自分のを絡ませて自分の力を抜く。無論、僕が諦めた

訳ではない。これから体を襲う衝撃に身を備えているだけだ。

そうでもないかと、まず間違いなく体が千切れ飛ぶ。

「……私が逃がすとしても、私から逃げられるとも思ってるですか？ ふっざけるんじゃないですねーですよ！！」
【その枝は間違いなく千の^{トリック}ハンド^{アート}だった！！】

縹夢は新たに魔術を発動させる。縹夢の左腕全体が光り出し、光は無数に枝分かれしていく。枝分かれた光の先端、その一つ一つが手の形を取り僕たちを捉えようと襲いかかってくる。

けど、油断したな？ 何度もその光景を見ている僕たちにとっては予測済み。

でもって、今の夕里は速い。ただ単純に、速い。そこに僕のサポートを加えたら、逃げ切る確率は飛躍的に上がる。

「いつくぜええええええ！！」 おおおおおおおおつらああああああああ！！」

「……くうう」

歯を食い縛れ。本番はここからだ。

息を長続きさせるために息を大きく吸い、全ての光の手に対処する！

「———— 右左左斜め上真横右方面上前方左斜め下右右左右斜め下前方真正面右斜め上左斜め上同時下から上上下下左右同時左左左左斜め下左右同時……ゆ、夕里。もうちょっと優しく、酔うからねこれ？」

「ずいぶんと余裕だな teme コラ！」

いや、僕は夕里と違って肉体的な負担はあまり耐えられないからね？ あと余裕じゃない、全然余裕じゃない、吐くから。これも自業自得だといえ、少し後悔し始めている僕がいた。

男だの女だの言う前に、ただただ情けなく思う。いや、うん。生物学上女性である夕里に背負われているくせに何言ってるんだって感じだけどさ、僕より夕里の方が単純に強いからどうでもいい。

情けないなあ、僕。

ほら、夕里もイライラしてきているし、そろそろしびれを切らすだろう。夕里の足に魔力が溜まってきているし。

「夕里、もうやっちゃっていいよ」

「やっとか、しっかり掴ってるよ！」

夕里が叫ぶと同時に右足を振り上げ、一気に振り下ろす。

魔力が、爆発する。

「クロックギアスタンブ【千里先到達の一步】——！」

瞬間、全てが流れた。あまりの速さに眼の処理速度が追い付かないのだ。もうすでに遠くにある瀧夢の顔は、いつも通りの無表情だ。ただ兄である僕から言わせてもらえば、その顔にはありありと悔しさが浮かんでいた。

「……あー」

「っしやあー！ いやー危なかったな、さすがのオレも危機感を感じずにはいられなかったぜ……ん？ どーしたよ、瀧夢から逃げられたのがそんなに嬉しかったのか？」

「あーいや、そうなんだけど、ね——」

——ねえ夕里。こちらへんにケーキ屋って無かったかな。

すでに暗くなりはじめた街中で夕里に尋ねる僕の頭には、どうやって瀧夢の機嫌を直そうかというなんとも場にそぐわない考えしか浮かんでいなかったのだった

一話 2 (後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4649r/>

カケモノ

2011年10月7日03時23分発行